原著論文

イマジネーション理論と TLMG による促進的記号の検討

――「コト」としての食をテーマとした事例をもとに――

上　川　多恵子[1)]・宮　下　太　陽[1), 2)]・安　田　裕　子[3)]・サトウタツヤ[3)]

（立命館大学大学院人間科学研究科／博士課程後期課程[1)]・

日本総合研究所未来社会価値研究所[2)]・立命館大学総合心理学部／教授[3)]）

本稿は「コト」としての食をテーマとし，ゼミ仲間とのランチミーティングという状況下における食物選択のプロセスと内化と外化のプロセスについて「複線径路等至性アプローチ：TEA（Trajectory Equifinality Approach）（安田・サトウ 2017）」を用いて分析し考察した。本事例はランチミーティングという共食の場で「たまごサンドを食べる」という径路を TEM で分析した後，TLMG によってその食物選択の内化と外化のプロセスを分析した。本稿ではパースの記号論とジトゥンのイマジネーション理論を応用した分析を行い，「他者には規制することができない個人の心」を捉える個人的助勢と個人的方向づけという概念を加えることで，「他の価値観をもつ人との間で折合いをつけなければならないマナーに関わる個人の心」という社会的な諸力と区別しながら分析した。また TLMG での分析では TEM で捉えた社会的・個人的諸力が促進的記号となることが示唆された。そして，「その場にふさわしいものを選びたい」という価値観を中心に，他者とマナーに関わる思考を繰り返しながらランチミーティングにおいて「たまごサンドを食べる」という食物選択に至る心の動きが明らかになった。（484 字）

キーワード：共食，食物選択，イマジネーション，内化と外化，複線径路等至性アプローチ

立命館人間科学研究，No.45，1–19，2023.

Ⅰ．はじめに

「食」は生活をしていく基礎と呼ばれる「衣食住」の中の一つであり，生き物にとって重要な営みの一つである。石毛（2015）は人間が食物を食べるということについて，環境の中から狩猟，採集などの手段によって獲得することと，口に入れた後の消化や栄養の間には，料理に代表される食品加工と共食を中心に発達してきた食事行動という，きわめて文化的な現象が存在していると説明している。この「共食」という行いについて，石毛（2015）は「人間以外の動物にはみられない行動である」としており，その理由として，動物においては成長したら自分で餌を探し，自分だけで食べるのが原則で，動物の食事行動は個体単位で完結し，共食はしないと述べている。

また，サトウ（2015a）は「動物としてのヒトは，食『物』を摂食するが，文化的存在としての人は，コトとしての食を行うこと，即ち食『事』をする。そして，物（モノ）を事（コト）に変えるのが，記号の働きなのである（p.204）」と指摘しており，何を食べるか，どのように食べるかということは記号によって介在され，その記号を読み解いて行動できるのが，文化的な振る舞いなのであるとしている。「何を」の部分はモノとしての食であり，「どのように」の部分は

コトとしての食である。前者は食物＝モノ，後者は食事＝コトであり，その媒介として食「品」が位置づけられる（サトウ 2015a, p.199）。

媒介としての食「品」には販売されているもの，サービス，メニューなどが含まれており，食物と食事を二項対立的に捉えるのではなく，食「品」もふくめて三項関係のなかで相互に媒介し合う連環のなかで食の研究を総合的に行うべきだと，サトウ（2015a）は指摘する。

このようなことから，本稿では文化心理学の視点から「コト」としての食，そして「共食」というテーマにおいて主に「個人心理レベル」および「文化・習慣レベル」での人間の文化的な振る舞いについて考えたい。

Ⅱ．コトとしての食とは？
――社会的な振る舞いと人の意識について

石川（2019）によると，「食」には「食べる『もの（food）』と，食べる『コト（eat）』，両方の意味があると述べられており，おいしい食を考えるときにおいしさの要因が目の前にある料理というモノにあるのか，仲間と楽しく食卓を囲んでいるというコトにあるのかは，人それぞれであると述べている。また，石川（2019）は食べることにはその人特有の意思や意識が潜んでおり，何を食べるか，どのようにして食べるかにはその人なりのルールが存在していると指摘している。食べるという個人の行為は社会的な意味をもっており，人びとのアイデンティティの構築に重要な役割を果たしているとしている。

そのような社会的な意味に関わるとされるものとして「食べる」ことに対する作法が考えられる。岡部（2018）は，人間にとって食べるという行為が生命を維持するのに必要な栄養を摂取するという以上の意味を常に含んでいることを指摘している。それは，食べるものさえ間違わなければ私たちは病気や死の危険にさらされることはなく，作法に則って食べなかったからといって法律に触れるわけでもないのに，人々は食事を共にしている人々を戸惑わせたり不快にさせたりしないために食事の作法を意識するからであると主張している。そして，食事の作法を意識しなければ，人は恥ずかしさを覚え，どうしようもなくいたたまれない気持ちになる恐れがあるとも述べている（もっとも，時と場合によっては，敢えて作法に反したり作法を崩したりすることが，作法をかたくなに順守するよりも洗練された品のよい行為だとみなされることもあるという）。このようなことから，岡部（2018）はレヴィ＝ストロースの主張に則すなら，「食事の作法とは，その起源においては，『人間のまえにまず生命を，生命のまえには世界を優先し，自己を愛する以前にまず他の存在に敬意を払う』という仕方で，人間がこの世界を生きるための『生きる知恵』の顕れだったのである（p.186）」とまとめている。すなわち，「食べる」という行為は，他の存在に対する意識が優先されるというのである。木佐木（2008）は「共食は，本能的な食行動に文化を付加する人間の営みであり食に関する内面的・精神的な側面である（p.266）」と述べ，食事を共にする他人のまなざしを意識してなされる行為であると主張する。また，共食する者同士が愉快になったり連帯感をもてるようにしたりするために，食事を円滑に営むためのルールを社会・文化ごとに決めていると指摘している。

徳永・庄司・武川（2015）は一人で食事をする孤食環境と誰かと共に食事をする共食環境での人の食行動に関する違いについて分析している。孤食環境で人は食事をしながらテレビや携帯電話に自由にアクセスし，それでなければ食べることに集中するなど，コンテンツへのアクセスを自分本位に決定し，自由に食事をすることが特徴である。一方，共食環境においては，「他者とのコミュニケーションを継続しながら食事

を進めなければならない社会的な制約の下にあるため，人の行動も制約されたものと解釈できる（p.686）」と主張し，「社会的行動が創発され，社会性が育まれる場である」と述べている。

食事の作法・マナーに関する言及として，吉村・おおひなた・佐藤（2020）は歴史学者であり茶道史研究者の熊倉功夫の言葉を引用し，食事の作法というのは見て分かるが，個人の心の問題は外からは見えないため誰にも言うことはできず，法律で規制されているわけでもないことを指摘し，人の心の問題と法律の間の領域にマナーがあると主張した。また，石川（2019）はメニューに載っている数ある料理の中からたった一つの料理を選ぶとき，そこにはその人の顔や声だけでなく，選んだ食べ物自体からも心理が垣間見えてくるという。そして，食にはそれぞれのイメージがあり，その食が私たちの心や行動に影響を与えているとしている。

しかし，「何を食べるか，どのようにして食べるか」という目に見える行為と「その人特有の思想や意識」という目には見えない個人の心，そしてその行為と心の間の動きについて考察することは難しい。目には見えない個人の心と目に見える行為との間にある動きを捉えることができれば，共食という場はもちろんのこと，個々人の選択と他者との関わりやマナーなどについて理解を深め，人と人との相互理解を深めることができるのではないだろうか。

Ⅲ．研究目的および研究方法

本稿は「何を食べるか，どのようにして食べるか」という目に見える行為と「その人特有の思想や意識」という目には見えない個人の心，そして目に見える行為と目に見えない個人の心の間にある動きについて，「共食」をテーマに考察することを目的とする。人が共食という場において何をどのように食べ，どのような特有の思想や意識と結びつきながら食事を行うのかという径路を分析するために「複線径路等至性アプローチ：TEA（Trajectory Equifinality Approach）（安田・サトウ 2017）」を用いて研究を行う。

TEA は「時間を捨象せずに人生の理解を可能にしようとする文化心理学の新しいアプローチ（サトウ 2015b，p.4）」であり，「異なる人生や発達の径路を歩みながらも類似の結果にたどりつくことを示す等至性の概念を，発達的・文化的事象に関する心理学研究に組み込んだヴァルシナーの創案に基づいて開発された（安田 2019，p.16）」ものである。TEA は時間経過とともにある人間の文化化の過程を記述する「複線径路等至性モデリング：TEM（Trajectory Equifinality Modeling）」，対象選定の理論として等至点的なイベントを実際に経験している実在の人をお招きして，その話を聞くという手続きをもつ「歴史的構造化ご招待：HSI（Historically Structured Inviting）」，自己モデルであり，個人活動レベル（層 1），記号レベル（層 2），信念・価値観レベル（層 3）の三つの層により人間の心理内的変容過程を理解する理論である「発生の三層モデル：TLMG：Three Layers Model of Genesis」（サトウ 2015b，安田 2019）という三つの理論構成から成り立っている。

本稿の事例は，博士課程後期課程のゼミ仲間である著者のうちの 2 名が共著論文を書くために実際に待ち合わせをし，その打ち合わせ実施時の昼食の取り方の経験を扱うものである。ある個人（筆頭著者）にとって「めったに行かない東京駅で待ち合わせて昼食をとりながらゼミ仲間と議論する」という，いわゆるランチミーティングという状況下において，第 2 著者であるゼミ仲間とのランチミーティングで「筆頭著者がたまごサンドを選択した」という事例を扱い，どのようにしてたまごサンドを選択したのかを TEM で分析する。このような状況下での事例を扱った理由は，その個人にとってめった

に行われないこと，または初めての状況，つまりその経験がその個人にとって日常化しているとは言い難い状況下での食行動を対象としたためである。本事例での中心的な部分となる「ゼミ仲間と共著論文を書くためのランチミーティングをする」という状況は，本稿での研究対象としたある個人（筆頭著者）にとって初めての経験であった。筆頭著者はこれまでに東京駅へ行ったこともあり，第2著者とはゼミの仲間うちで（数名集まって）食事をしたこともある。しかし，東京駅へ行くこともゼミ仲間で集まることも筆頭著者にとっては日常生活の中で大半を占める出来事ではなく，ましてゼミ仲間と二人で共著論文を書くためのランチミーティングをすることは初めてであった。そのうえ，自身が筆頭著者であるという状況から少なからず不安と緊張感を持っていたことは確かである。サトウ（2015a）によると，文化は空気のようなものであり，普段は気づかれにくく「自然なこと」として認識されやすいが，異文化と接触したときになって自文化に気づく，またそれは食においても同様であると述べられている。ここで，異文化というと海外との接触などが思い浮かぶかもしれないが，池田（2019）は留学などの新たな環境に身をおいた場合だけでなく，普段の生活の中にも驚きや発見はあるはずであると指摘している。このようなことから，本事例は日常生活のなかにあるが，現状においてめったに行われない，もしくは初めての経験という状況下で少なからず不安や緊張感を持っているということを前提に，その中で起こる食行動が本人にとってどのような意味を持っているのかをTEMを用いて分析することを試みる。そして，その選択に至るまでに個人の中でどのような心理内的変容過程が見られるのかをTLMGによって考察する。また，塙（2019）が述べているように，わたしたちはどんな時でも「その状況でどうふるまうべきか」をある程度気にかけて生活しており，日常生活における適切な対処法として自分の経験や社会的な慣習に基づいて内面化された「ふさわしさ」を参照しながら生活している。このような「ふさわしさ」に対する個人内における「何を食べるか，どのようにして食べるか」という目に見える行為と，「その人特有の思想や意識」という目には見えない個人の心，そして目に見える行為と目に見えない個人の心の間にある動きに関して事例研究を用いて明らかにしたいと考える。

以上のように，現状めったに行われない，もしくは初めての経験という状況下において，これまでの自分の経験や社会的な慣習によって内面化された「ふさわしさ」を個人がどのようにして参照しながらふるまっていくのかをTEAを用いて分析することを目的に研究を行う。本研究は「めったに行かない東京駅で待ち合わせて昼食をとりながらゼミ仲間と議論する」というランチミーティングの状況を扱うにあたり，以下のような手続きで行った。まず，筆頭著者がミーティング場所を設定し，そこで第2著者と待ち合わせて食事（ランチ）をとりながら，共著論文でどのようなテーマを扱うかについて話し合った。一通りテーマについて話し合ったあとで，筆頭著者がどのようにして「たまごサンド」（ここでは，ランチミーティングで食べるもの）を選んだのかを第2著者に語りながら1回目のTEM図を描いた。つまり，ランチミーティングを行う前からすでにテーマが決まっていたのではなかったため，筆頭著者は研究を意識して「たまごサンド」を選んだわけではない。TEM図に描いたのは，注文するまでの約15分（第2著者が待ち合わせ場所に到着するまでの時間を含む）の出来事である。その後，本稿をまとめる中で第2著者とオンラインミーティングを5回（1回につき1時間程度）行い，筆頭著者が描いた図を第2著者に見せながら「たまごサンド」を選んだ時の状況を振り返る中でTEM

と TLMG による分析を精緻化させていった。このように，本稿には筆頭著者自身の経験を扱うという点で，「自分の経験を振り返り，『私』がどのように，なぜ，何を感じたかということを探ることを通して，文化的・社会的文脈の理解を深めることを目指した（井本 2014）」オートエスノグラフィーの視点が含まれる。第 2 著者はその手続きにおいて筆頭著者に対するインタビューアーの役割を果たしている。なお，本事例となった実際の食事において筆頭著者と第 2 著者が同じものを注文した（分け合った）わけではなく，各々が頼みたいものを注文して食事をしている。そのため，研究対象は「ゼミ仲間と共著論文を書くためのランチミーティングをする」という経験が初めてであった筆頭著者のみとしている。

Ⅳ．本稿における TEA を用いた分析の特徴

本稿における TEA を用いた分析の特徴を 3 つに分けて以下に述べる。

1. SG・SD および PG・PD の記述――「他の価値観をもつ人との間で折合いをつけなければならないマナーに関わる個人の心」と「他者には規制することができない個人の心」に関わる諸力として

ヴァルシナー（2007＝2013）は社会という概念について，「人間存在の個人的領域と公共的領域の交点を意味し，個人の間でも組織制度の間でも，人間の伝達プロセスにおける記号的媒介として働き，かつ心理－内的制御子として働く（p.76）」と指摘している。つまり，個人と公共の場をつなぐ中で諸々の情報が記号として働き，その記号が個人の心理と公共の場を調整する役割を果たすと考えられる。また，ヴァルシナーは「社会に属することは，個人の中核においては必然的に境界的でしかない。この境界性は，個人を，安定した状態にあるときですら『である』『かのような』の間の緊張を必然的に伴うという見方の結果である（p.90）」と述べており，「社会的個人――ある社会的場面の中の主観的存在――は，常に社会的役割もしくは規範の可能性の規範内で行為し，そして社会的役割自体を認識しようとする努力のなかで社会的場面の境界域を検証している（p.91）」と指摘している。すなわち，個人的領域と公共的領域が交わる「社会」という場において，個人が様々な制限や思索の中で調整し，社会で生きる一個人としての振る舞いを検証していると考えられる。このような「社会」という概念に対するヴァルシナーの主張は TEM における分岐点（BFP：Bifurcation Point）での緊張関係で取り上げられる社会的助勢（SG：Social Guidance）および社会的方向づけ（SD：Social Direction）にも関連があるのではないだろうか。それは BFP での SG および SD での緊張関係にこそ，個人のもつ文脈性や文化や社会がもたらす制約が反映されているからである（福田 2015）。

SG とは等至点（EFP：Equifinality Point）に向かう有り様を促したり助けたりする力を象徴的に表したもので，SD とは EFP に向かう個人の行動や選択に制約的・阻害的な影響を及ぼす力を象徴的に表したものであり，本稿における「共食」というテーマにおいて，分析するための概念として特に重要である。マナーに関する記述において，熊倉（2014）は「完全に個人の人間の内部にある価値観・倫理観・美意識といったものはマナーの領域に入らない。これは外部から立ち入ることのできない個人の心の問題である。（p. viii）」と述べ，他の価値観をもつ人との間で折合いをつけなければならない場合にはマナーが生じるとしている。このようなマナーに関する記述には，「共食」においても「他者には規制することができない個人の心」と「他の価値観をもつ人との間で折合いをつけなければ

ならないマナーに関わる個人の心」が見られると考えられる。ヴァルシナーが「社会と言う概念は，人間存在の個人的領域と公共的領域の交点を意味している」と述べているように，マナーはまさしく個人的領域と公共的領域の交点を意味する一つではないだろうか。そのため，本稿では「他者には規制することができない個人の心」と「他の価値観をもつ人との間で折合いをつけなければならないマナーに関わる個人の心」に関わる諸力を分けることを提案し，SG および SD に加えて，「他者には規制することができない個人の心」を捉える諸力として個人的方向づけ（PD：Personal Direction）および個人的助勢（PG：Personal Guidance）という概念を加えて検討を試みたい。

2. SG・SD および PG・PD の記述にパースの記号論とジトゥンのイマジネーション理論を応用して――TEM による人生径路の分析を深めるために

TEM を用いて分析を行う際に，社会的な支援や制度といった諸力や行動を後押したり妨げたりする認識や認知がどのようなものであったかを SG・SD の概念を用いて捉えることができる。

さらに，本稿では SG・SD となった対象がどのように解釈されたものであり，如何にして捉えられたのかといった理解を一歩深めるため，SG・SD および PG・PD の記述にパースの記号論とジトゥンのイマジネーション理論を応用し分析する。

まず，パースは記号現象が「三つの構成要素（三項関係）」からなることを示し，それは記号，対象，解釈項の三つであるとしている（有馬 2014）。記号はそれ自身とは別の何かを表すもの（サトウ 2019）である。ヴァルシナー（2007＝2013）によると，パースは記号を「心に対して，他の物をあらわす対象である」とし，「記号は心によって作られ，心は記号を通じてはたらく。それゆえ，記号は外的環境における対象と結ぶことを通じて，われわれがわれわれ自身と関係する，洗練されたツールなのである（pp.28–29）」と述べている。このようなパースの記号論に基づく「対象」は，思考の対象ということであり，物，出来事，関係性，品質，法則，論証，フィクションなど，多様なものがあてはまる。そして，対象を表している記号の意味にあたるものは解釈項と呼ばれる（サトウ 2019）。すなわち，上記のような外的環境における多様な対象が媒介されることによって，その記号が解釈される。そして対象を媒介することによって解釈された記号が人の心に働きかけ，思考させるのだと考えられる。本稿では，TEM 図を描く中で立ち現れた SG・SD および PG・PD が何を対象としたものかを明示する。ここでの SG・SD および PG・PD はそれらの対象に対する解釈項にもあたると考えられる。つまり，SG・SD および PG・PD が単なる物，出来事，関係性，品質，法則，論証，フィクションなどではなく，記号となり得る力をもった諸力として見なされる。

次に，ジトゥン（2015）は，人びとのライフ（生命・生活・人生）は，実際に何をしたか，あるいはどのように現実を経験したかのみではなく，大部分をイマジネーションが担うと述べている。つまり，現実にあった経験だけでなく人びとが生活の中で様々なイマジネーションを行っているという主張であると考えられるだろう。イマジネーションは人びとを実際の行動から切り離し，時間と因果関係の非可逆性の制約から解放する。そして，過去にあった或いはあり得たかもしれない経験，あり得ること或いはあるべきではないことなどの代替的な現在，これからあり得るかもしれない或いはあるべきことなどの未来に向けて方向づけるループ[1)]を求め，そし

1）イマジネーションを「トリガー」「リソース」「アウトカム」を伴う時間的な連続のループであるとして概念化している（Zittoun & Gillespie，2016，著者訳）

て現在をより豊かにするものである（Zittoun & Valsiner 2017，著者訳）。また，ジトゥンはイマジネーションを「現在，過去，あるいは副次的な経験を通して集められた様々な素材が資源として動員され，利用されることで，感情的で具現化された経験を形にする記号論的なプロセスである」（Zittoun & Gillespie 2016，著者訳）」と定義している。このようなイマジネーションと TEM の関連性について，ジトゥンは「イマジネーションは人間の心理機能の中心的なものである。このようなことは，TEM が未来と過去の軌跡を調整する機能を持つことを意味するための必要な公理的主張である（Zittoun & Valsiner 2017，著者訳）」と述べている。実現したことだけではなく実現しなかったことを含めて二次元で描く TEM では，過去，現在，未来を想像上のものとしてとらえる場合もあり，すなわちそれはイマジネーションによるものであると考えられる。

また，ヴァルシナー（2007＝2013）によると，「人は文脈から『立ち去る』ことはできない。……人は，記号的媒介という手段で，今―ここの文脈と距離をとる。それは，私は私がその一部である文脈を省みるというかたちをとる。（中略）距離化なしに，人が今―ここ以外の文脈について考えるのは不可能である（p.18）」と論じていることからも，今―ここを焦点にあてながら描く TEM を用いて分析するにあたり，今―ここは一体どのような過去，現在，未来の文脈をイメージしているのかを考察することが必要であると考える。

3. TLMG で捉える内化と外化のプロセス――BFP における個人の心理内的変容過程について

TLMG とは，文化的な記号を取り入れて変容するシステムとしての人間の動的なメカニズムを捉える理論であり，BFP における心理内的変容過程を捉えるのに有用なものである。そして想定する個人活動レベル（層 1），記号レベル（層 2），信念・価値観レベル（層 3）という三つの層間情報の内在化・外在化のプロセスにより，行動と価値・信念の様相を促進的記号の絡み合いによって理解しようとする（安田 2015a p.34）。サトウ（2015b）は第 2 層における促進的記号の発生が人を新しい選択肢へと誘うと説明している。つまり，BFP の考察を試みる上で TLMG を用いることは，その個人における内化と外化のプロセスに対する理解を深めることに繋がる。

ヴァルシナー（2007＝2013）は内化と外化について，「内化は，外的に存在する記号的素材を分析し，内的な心理的領域において新奇なかたちで統合するプロセスである（p.420）」と指摘しており，「外化は，ある人の心理－内的に存在する（主観的な）個人的－文化的素材を内側から外側へと置換しながら分析し，これらの素材の新しい統合形態として外的な環境を変更するプロセスである（p.420）」と述べている。つまり，内化は外の環境から記号となって現われた素材を個人内に取り入れていくプロセスであり，外化は取り入れられた記号が個人のものとなって（内化されて）目に見える行為へと変わっていくことであると考えられる。そして，ヴァルシナーは図 1 のように，「構築的な外化と構築的な内化のプロセスが絶えず作動している（pp.420–421）」と説明している。例えば，図 1 に描かれているフィードフォワードのループは，発話を生成している話し手の最初の聞き手は話し手自身であるということは，必然的な事実をもたらすとし，それは，話し手が話しながら即時的なフォードバックを得ているからであると主張している。そして，「内化は何らかの形態の外化を経てのみ観察され，外化の結果は，さらなる内化プロセスへと送り込まれる（p.422）」と指摘している。

このような内化と外化のプロセスという観点

から，本稿では目に見える行為と，その行為に至るまでの目には見えない個人の心の動きについて TEM で描いた BFP を中心に TLMG を用いて考察する。

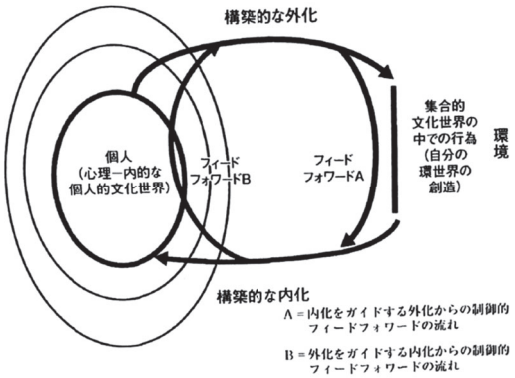

図１　相互依存的な構築プロセスとしての内化と外化（ヴァルシナー 2007＝2013, p.421）

Ⅴ．ランチミーティングで「たまごサンドを食べる」径路の分析

本稿は「何を食べるか，どのようにして食べるか」という目に見える行為と「その人特有の思想や意識」という目には見えない個人の心，そして目に見える行為と目には見えない個人の心との間にある動きについて，「共食」について内化と外化の観点から検討することを目的とし TEA を用いて分析を行った。表１は TEM 図を描く際に作成した「本事例における諸概念の枠組み」であり，図２は本 TEM 図内での表記のしかたを示した。本稿では図２のように，TEM 図上に描く SG・SD および PG・PD にパースの記号論を応用した「対象」の記述を【　】で示し，ジトゥンのイマジネーションという概念を〈　〉で示す。図３は TEM を用いて時間的変容を捉えた図である。

表１　本事例における諸概念の枠組み

諸概念とその意味（安田 2019）	本事例における諸概念の設定
EFP：等至点 研究目的に基づき，ある行動や選択を焦点化するポイント	（ランチミーティングで）たまごサンドを食べる
P-EFP：両極化した等至点 EFP とは価値的に背反したり，EFP の補集合となるような行動や選択をとらえたりするポイント	ランチミーティングという設定にとらわれずに自由に好きなものを食べる
S-EFP：セカンド等至点 EFP 以後の当事者にとっての目標や展望のようなものを焦点化するポイント	ゼミ仲間とスムーズに議論できそうなランチを食べる
P-S-EFP：両極化したセカンド等至点 S-EFP とは価値的に背反したり，S-EFP の補集合となるような行動や選択をとらえたりするポイント	相手は気にしないだろうということに甘えて食べたいランチを食べる
OPP：必須通過点 「通常ほとんどの人」がある状況に至るうえで必ず通るもの，また制度・法律・慣習など文化的・社会的・現実的な制約のありようとそれをもたらす諸力をみつける手掛かりになるポイント	①　ランチミーティングの場所を考える ②　写真付きのメニューを開く
BFP：分岐点 文化的・社会的な制約と可能性の下で実現される意思や葛藤・迷いを含む個別多様な歩みを複数に分かつポイント	①　メニューの中から候補を選ぶ ②　たまごサンドを食べようと思う
SG：社会的助勢 EFP に向かうありようを促したり助けたりする力を象徴的に表した諸力	「EFP：たまごサンドを食べる」に向かうありようを促したり助けたりする力を象徴的に表した諸力
PG：個人的方向づけ 等至点に向かって，それを促したり助けたりする他者には規制することができない個人的な諸力	「EFP：たまごサンドを食べる」に至るのに，それを促したり助けたりする個人的な諸力
SD：社会的方向づけ EFP に向かう個人の行動や選択に制約的・阻害的な影響を及ぼす力を象徴的に表した諸力	「EFP：ランチミーティングでたまごサンドを食べる」に向かう個人の行動や選択に制約的・阻害的な影響を及ぼす力を象徴的に表した諸力
PD：個人的方向づけ 等至点に向かって制約的・阻害的な影響を与える他者には規制することができない個人的な諸力	「EFP：ランチミーティングでたまごサンドを食べる」に至るのに制約的・阻害的な影響を与える個人的な諸力
可能な径路	収集されたデータに明示的でなくとも「EFP：たまごサンドを食べる」または「P-EFP:ランチミーティングという設定にとらわれずに自由に食べたいものを食べる」に至るまでにありうると想定される径路

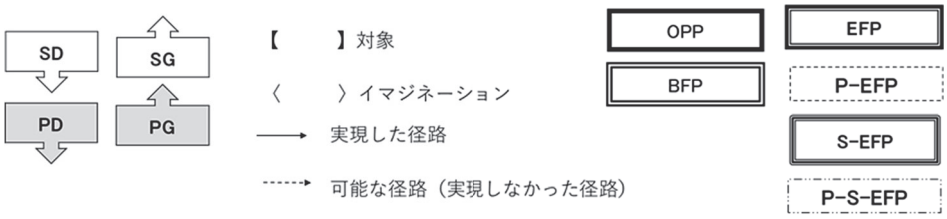

図２　本 TEM 図内での概念の表記のしかた

1. ３つの時期区分による「たまごサンドを食べる」径路

「たまごサンドを食べる」を EFP として設定し，TEM 図を描く中で現れた OPP と BFP を指標としてその径路の時期区分を設定した。安田（2015b）は，「社会的な諸力や文化的記号の振る舞いが捉えられるポイントは，時間とともにある人の歩みの一転換点であるという見方が成り立つのであり，必須通過点や分岐点は，人生径路や人間発達の変容・維持のプロセスを捉えるうえで時期を画するメルクマール（指標）の役割を果たすものとして，理解できるのである（p.46）」と述べている。本稿でのゼミ仲間とのランチミーティングという状況下において，その期の特徴を検討すると，１期「ゼミ仲間と議論するのにふさわしい場所を探す」，２期「議論するのにふさわしい食事を探す」，３期「食べるものを決定する」という３つの時期に分けることができた。以下では，１期と２期で捉えられた OPP と BFP を中心に，その径路で見られた様々な SG･SD および PG･PD について論じる。

(1)．１期「ゼミ仲間と議論するのにふさわしい場所を探す」――OPP に焦点をあてて

OPP ①「ランチミーティングの場所を考える」，OPP ②「注文するものを考える」という２つの OPP が捉えられた。OPP ①ではランチミーティングの場所を考えるうえで，今の自分の立場に対して「打ち合わせの主催者（SG）」であるという気持ちが先行し，ランチを食べながらゼミ仲間と議論がしやすそうな場所を探していたことが捉えられた。そして，喫茶店に対する「落ち着いたレトロな雰囲気（SG）」がミーティングの場所としてふさわしいと感じ，選択肢にあったバイキングではなく，喫茶店を選ぶという行為に至った。バイキングではなく喫茶店を選ぶに至った SG としては，値段に対して「2000 円近くするのはランチミーティングにしては高いという気持ち」が働き，〈料理の種類は豊富だが，（値段に対して）負担に思うかもしれない〉というバイキングにした場合の相手の反応を想像するイマジネーションが発生していた。また，同じく値段という対象について「集まる目的は食事ではないという気持ち」が SG として働き，〈打ち合わせがしやすい場所がいい〉というランチミーティングをする目的である「打ち合わせをしている場面」を想像していた。その後，店内では店員から渡されたメニューに対して「注文すべき」という SG が働き，OPP ②「注文するものを考える」ことになった。

つまり，OPP において「ミーティングの主催者が場所を決めたほうがいい」，「ランチミーティングとしてふさわしい場所や食事は何か」という意識を持っていたと考えられる。

(2)．２期「議論するのにふさわしい食事を探す」――BFP に焦点をあてて

BFP ①「メニューの中から候補を選ぶ」，BFP ②「たまごサンドを食べようと思う」という２つの BFP を捉えた。

注目すべきところは，BFP ①の中に選択肢として浮かんだ「せっかくだからトーストより少

し高い価格のもの（例，ハムトースト）」，「トーストをたのむ」，「パスタをたのむ」という３つの選択があったことである。もちろんメニュー表にはこれら以外の料理も数多く並んでいたが，筆頭著者の選択肢として浮かんでいた料理はこの３つであった。そこで，どのようにしてこれらの料理が選択肢となっていたのかを分析した。まず，食物選択に入るきっかけとして，「食事すること」という対象に対し「その場の雰囲気に合ったものや特徴的なものが食べたいという気持ち」がSGとして働き，そこには〈その地の特産物・限定品を選んできた経験〉という過去を振り返るイマジネーションが発生していたことがわかった。

次に，BFP①「せっかくだからトーストより少し高い価格のもの（例，ハムトースト）」を選択したことについて述べる。何を食べるかを考え始める時に「めったに行かない東京駅（SG）」という場所に対して〈次はいつ東京駅に来るかわからない〉というイマジネーションが発生しており，このようなイマジネーションはどのようなランチを食べようかを考える一つの要素となっていた。そして，その後に喫茶店で店員に渡されたメニューを見ることで「きつね色に焼けた様子」のトーストの写真が目に入り，〈おいしそう〉というその料理に対する味や風味を想像させるイマジネーションが発生してトーストを食べようと思わせていた。しかし，そのまま単純にトーストを選ぶという選択をすることはせず，「相手が来るまでの間に何を食べるかを考えられる時間がある（SG）」ことで，食物選択における思考をめぐらすことになった。ここでは「少し高い価格のもの（例，ハムトースト）」を選ぼうとしたことに，値段が「その店で一番安いものを頼むのはわざわざ来てくれている人に失礼な気がする」という気持ちがSGとして働いていた。値段に対して「その店で一番安いものを頼むのはわざわざ来てくれている人に失礼な気がするという気持ち」がSGとして働いたのには，〈主催者がもてなすという場面を見てきた経験〉という共食に伴った食物選択をする場面を思い出すイマジネーションが発生していた。

また，「メニュー」という対象に対して，「パスタがおいしそう」というSDが働き，パン系の食事よりも〈（自分は普段）パスタをよく選ぶ〉というこれまでの食物選択に関わるイマジネーションが発生しており，本人にはトーストだけでなくパスタを選ぶという選択肢があった。

では，パスタという選択肢があったのにも関わらず，普段はあまり選ばない「パン系」の食事を食べようとさせたのはどうしてだろうか。そこには「パン」という対象に対して，「利き手じゃなくても食べられる」というSGが働き，〈食事中にペンや資料を持つ可能性があるかもしれない〉というこれから打ち合わせをする際に起こり得る状況を想像したイマジネーションが発生していた。そのことが最終的にパン系の食事を選ばせていた。つまり，今回の事例の「ゼミ仲間と議論する」という目的のもと「利き手じゃなくても食べられる」という力が，食事中にペンや資料を持つ可能性（近い未来）を想像させていた。このようにして筆頭著者は最終的に利き手でフォークを使うパスタではなくパン系の食事を選ぶ方向へと導かれたと考えられる。

しかし，同じ「パン系」の食事の中でもハムトーストを最終的に選ぶのではなく，更なる調整がなされていた。パン系の食事に決めた後，「ハムトーストはパンくずがこぼれて食べにくそうだと思う」と同時に「人と議論するのにパンくずをこぼしたら嫌だという気持ち」がSGとして働いており，〈パンくずをこぼしたら人と食事するのに行儀が悪い，資料が汚れるかもしれない〉というパンくずをこぼす自分や物を汚すことをマイナスイメージだと考えるイマジネーションが働いていた。このようなイマジネーションを

伴いながら写真を見ることにより，サンドイッチは「柔らかくて食べやすそう」という SG が働いた。さらに〈(サンドイッチは）手が汚れにくそうだ〉というイマジネーションが発生し，今回のランチミーティングでのマナーにおいてハムトーストを食べることよりもサンドイッチの方が無難な食事だと考えた。そして，サンドイッチと言えば「たまごサンドが好き」であるという個人的な感情も伴い，〈子どもの頃からよく食べているから，味に安心感がある〉という過去の経験を想像するイマジネーションが発生したことで「たまごサンドを食べようと思う」という BFP ②が生まれていた。もっとも，トーストを食べることに対して「パンくずをこぼすこと」に対する別の力，すなわち「たまごサンドを食べる」ことを阻害する SD も現れていた。そこでは〈(相手はパンくずをこぼすことに対して）気にしないではないか〉というイマジネーションが発生していた。つまり，本人にとってたまごサンドではなく，ハムトーストを頼む選択も最後まで残っていたと言える。しかし，それでもたまごサンドを選んだのは単純に自身の好きなものを食べたいという思いではなく「ゼミ仲間と議論する」という目的をより有意義にするためであり，「パンくずをこぼす可能性を排するのにトーストを選ばなかった」ことは，筆頭著者にとって「第 2 著者に不快な思いをさせないように」「筆頭著者である自分がペンや資料を持つ可能性があるので，少しでもスムーズに議論を進められるように」ということを意味していたと思われる。このようにそこでの社会的な振る舞いをこれまでの経験やこれから起こり得る可能性とつなぎ合わせて想像し，その場にとってふさわしいより良い場を作ろうとしていた。

ここまでをまとめると，共食する他者との関わりや視線を気にせず自分一人の空間で自由に食事をする孤食とは異なり，共食における「社会的なマナー」が影響した個人の食物選択の径路が捉えられた。そこには本人にとって「ゼミ仲間とスムーズに議論できそうなランチを食べる」(S-EFP) という展望があったと言えるだろう。

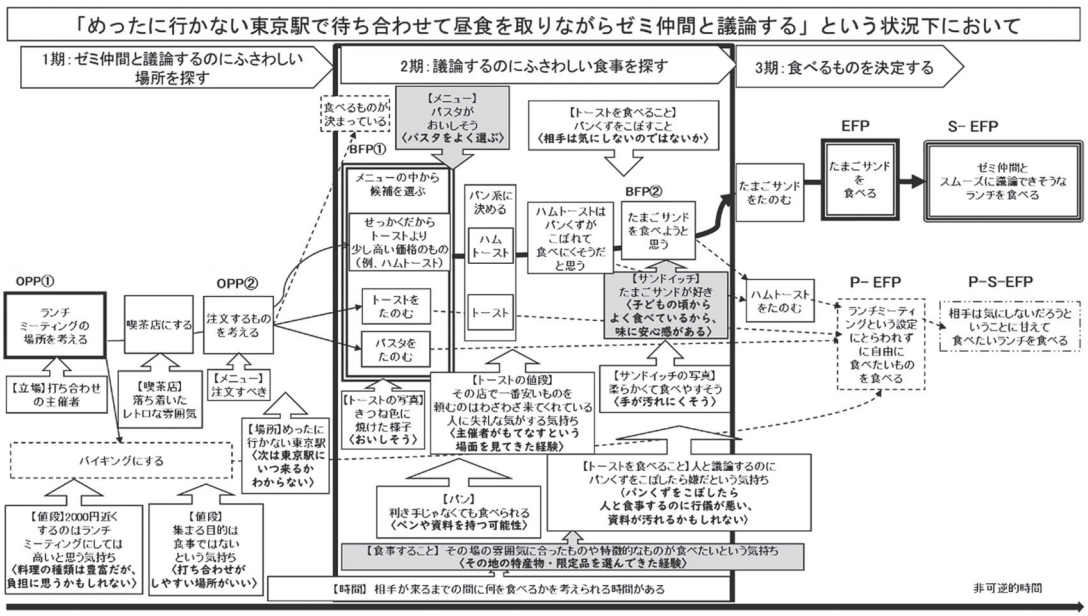

図 3　TEM 全体図「たまごサンドを食べる」径路

3.「たまごサンドを食べる」に至った径路の考察――TEM を用いて

上記のように「ゼミ仲間とスムーズに議論できそうなランチを食べる」という S-EFP に沿う形で「たまごサンドを食べる」という EFP に至ったことを明らかにした。何を食べるのか，どのようにして食べるのかは，その人特有の思想や意識と結びついており，個人の行為においても，社会的な意味を持っている。本事例では BFP で立ち現れる食事の選択におけるルールやマナーという記号を個人の中でどのように解釈しているのかという点について考察した。

また，そもそもサンドイッチというメニューはサンドイッチ伯爵モンタギュー家の次男であるジョン・モンタギュー（1718 − 1792）がゆっくり夕食をとる暇がなかったため牛肉を 2 枚のパンにはさんで持ってこさせたという経緯で開発されたと言われている。ビー・ウィルソン（2010＝2015）は，サンドイッチの革新的なところは片手で食べられる点であり，食事をしている最中にもかかわらず仕事を続行できるのだと述べている。ウィルソンが述べたような「片手で食事ができ，食事をしている最中にもかかわらず仕事を続行できるように作られたサンドイッチ」という食べ物の特性を，筆頭著者がこれまでの自身の経験により自然のうちに理解しており，ランチミーティングという今―ここの場にふさわしい食事であると認識して，本事例のようにゼミ仲間とのランチミーティングという場でサンドイッチを選んだ，と言えるだろう。

4. SG・SD および PG・PD についての考察――「コトとしての食」に関わる 3 つの諸力

本稿で見られた SG・SD および PG・PD は，まず「他者の存在を強く意識させる諸力」と「サンドイッチそのものを選ぶことに関する諸力」によって整理することができる。つまり，「サンドイッチ」という食べ物そのものは「モノ」としての食であると言えるが，「サンドイッチを食べること」をどのように選択して，最終的に「サンドイッチを食べる」に至ったのかといった「コトとしての食」となるための諸力を捉えることができた。ここでは 1 期と 2 期を「他者の存在を強く意識させる諸力」，「サンドイッチそのものを選ぶことに関する諸力」という 2 つの諸力に加えて，「恒常的諸力」の存在を示す。ここでの「恒常的諸力」とは「ある事象に対して違和感を持つことなく，本人にとってすぐに受け入れられるような諸力」を意味する。これら 3 つの社会的・心理的影響を及ぼした諸力を表 2 にまとめた。

「恒常的諸力」は，1 期「ゼミ仲間と議論するのにふさわしい場所を探す」に比較的多く見られており，つまり「ランチミーティングの場所を考える（OPP ①）」と「注文するものを考える（OPP ②）」という出来事を支える諸力となっていた。OPP となった出来事が捉えられた 1 期で「恒常的諸力」が比較的多く見られたのは，本人の中でそれらの諸力が習慣化して受け入れられる状態にあったからであろう。具体的に言えば，喫茶店に対する「落ち着いたレトロな雰囲気（SG）」は，筆頭著者にとって「議論するのにふさわしい場所になり得る」とすぐに受け入れられるような意味を持っていたと言える。また，OPP ②で見られたように，メニューに対する「注文すべき（SG）」という諸力は「店に入れば何かを注文しなければならない」という客としてのマナーであると考えられる。ここで特に興味深いのは「めったに行かない東京駅（SG）」がちょうど 1 期と 2 期の境目で見られたことである。筆頭著者にとって「めったに行かない場所」だからこそ〈次は東京駅にいつ来るかわからない〉というイマジネーションが発生しており，「議論するのにふさわしい食事を探す」必要性がより高まったと考えられるからである。例えば，本人にとって「よく行く（よく知って

いる）場所」であれば，「またすぐに来られるから何を選んでも気にならない」などといったような気持ちが諸力として現れていた可能性もあっただろう。すなわち，次はいつ来られるかわからない「めったに行かない東京駅（SG）」は，何をどのようにして食べるのかということを筆頭著者によく思考させた一つの大きな力となっていたと言えるのではないだろうか。

2期「議論するのにふさわしい食事を探す」では，「他者の存在を強く意識させる諸力」と「サンドイッチそのものを選ぶことに関する諸力」が多く見られており，数あるメニューの中から最終的に「たまごサンド」を注文して食べるということは，筆頭著者にとって「ランチミーティングという場で相手に失礼にならないように配慮しながら，議論がしやすくなるように工夫をする」という意味が含まれていたのではないかと思われる。

表2　1期・2期で見られた SG・SD および PG・PD について――「コトとしての食」に関わる3つの諸力

		1期：ゼミ仲間と議論するのにふさわしい場所を探す	2期：議論するのにふさわしい食事を探す
他者の存在を強く意識させる諸力	SD		【トーストを食べること】パンくずをこぼすこと
	PD		【メニュー】パスタがおいしそう
	SG	【立場】打ち合わせの主催者 【値段】2000円近くするのはランチミーティングにしては高いと思う気持ち	【トーストを食べること】人と議論するのにパンくずをこぼしたら嫌だという気持ち 【値段】その店で一番安いものを頼むのはわざわざ来てくれている人に失礼な気がする気持ち
サンドイッチそのものを選ぶことに関する諸力	SG		【パン】利き手じゃなくても食べられる 【サンドイッチの写真】柔らかくて食べやすそう
	PG		【食事すること】その場の雰囲気に合ったものや特徴的なものが食べたいという気持ち 【サンドイッチ】たまごサンドが好き
恒常的諸力	SG	【喫茶店】落ち着いたレトロな雰囲気 【メニュー】注文すべき 【場所】めったに行かない東京駅	【トーストの写真】きつね色に焼けた様子
		【時間】相手が来るまでの間に何を食べるかを考えられる時間がある（1期・2期）	

Ⅵ. TLMG による内化と外化プロセスの分析と結果――イマジネーションを手掛かりに

上記では，TEM 分析によって現れた諸力（SG・SD および PG・PD）を中心に考察しつつ，どのように過去，現在，未来の文脈をイメージしていたかをイマジネーションによって捉えながら，その径路を可視化した。ここでは「たまごサンドを食べる」という目に見える行為に加えて，「その人特有の思想や意識」という目には見えない個人の心，そして，目に見える行為と目に見えない個人の心の動きの間にあるものがどのように調整されているのかを分析する。そのために，内化と外化のプロセスという観点からイマジネーションの概念を手掛かりとして，行動と価値・信念の様相を促進的記号，すなわち人を新しい選択肢へと誘う（サトウ 2015b）記号の絡み合いによって理解しようとする TLMG を用いて分析し考察する。それはイマジネーションで捉えられた過去，現在，未来のイメージが「ゼミ仲間とのランチミーティング」という状況における外化された結果と結びついているからである。促進的記号という概念を作り出したヴァルシナーは，「記号が働きかけるときは現在であるがその記号を受けて人が何かを行うときには常に未来に向かっているということを重視すべきだ」と指摘している（サトウ 2019）。また，サトウ（2019）は，私たちの日常生活はさまざ

まな記号に囲まれるなかで，特定の記号が人の行動を促進する場合があるとし，そこにおいてこそ促進的記号の働きがあると述べている。このような観点から，ここではSG・SDおよびPG・PDという諸力の中でも特に「たまごサンドを食べる」という結果（等至点）に導いたと考えられる諸力を促進的記号（人を新しい選択肢へと誘う記号）として扱う。

1.「その場にふさわしいものを選びたい（扱いやすい・失礼にならないことも含む）」という個人の価値観と内化と外化の関連性――BFP ①およびBFP ②を中心として

第2期に焦点をあてながら，とりわけBFP ①ならびにBFP ②に留意して，個人における内化と外化のプロセスを捉えた（図4）。その表記の仕方は図5のとおりである。

まずBFP ①「メニューの中から候補を選ぶ」という行為に際し促進的記号として立ち現れたのは，「その場の雰囲気に合ったものや特徴的なものが食べたいと言う気持ち」というSGであった。ここでは〈その他の特産物・限定品を選んできた経験〉というイマジネーションが発生していることから，まずは喫茶店という場に対する「その場にふさわしいものを選びたい（扱いやすい・失礼にならないことも含む）」という個人の価値観（3層）が影響していた。この「その場にふさわしいものを選びたい（扱いやすい・失礼にならないことも含む）」という個人的な価値観は，その後に至る「たまごサンドを食べる」までの行為を結びつけるものとして影響していた。

次にランチミーティングという場に対する「その場にふさわしいものを選びたい（扱いやすい・失礼にならない）」という価値観をもとに「利き手じゃなくても食べられる」という促進的記号が発生し，ハムトーストかトーストのようなパン系の食事を選択しようとした。つまり，「その場にふさわしいものを選びたい」という個人的な価値観に内包される「その場」とは，「実際にいる場所（ここでは喫茶店）」と「何のためにその場所にいるのか（ここではランチミーティングという目的のため）」という二つの「場」を意味するものだと言うことができる。そのため，「ランチミーティングという目的を遂行する場」に対して「利き手じゃなくても食べられる」という促進的記号が発生していたことが，パン系の食事を選択した大きな理由であったと考えられる。さらに〈ペンや資料を持つ可能性〉があるというランチミーティングが行われる様子に関するイマジネーションが発生していたことからも，「利き手じゃなくても食べられる」という促進的記号がランチミーティングにおいてパン系の食事を選択することに影響を与えるものとして重要な意味を持っていたと言えるだろう。

また，最終的に「たまごサンド」を食べることになったのには，トーストの値段を見ることで「その店で一番安いものを頼むのはわざわざ来てくれている人に失礼な気がする気持ち」に，トーストを食べることに対する「人と議論するのにパンくずをこぼしたら嫌だという気持ち」が重なりながら促進的記号として働いたことがわかった。そこでは〈パンくずがこぼれたら人と食事するのに行儀が悪い，資料が汚れるかもしれない〉というイマジネーションが発生しており，ランチミーティングにおいて相手に不快な思いをさせないようにしたいというマナーに配慮しながらBFP ②「たまごサンドを食べようと思う」という行為に至っていた。このようにBFP ①からBFP ②までの内化と外化に影響を与えたものには，個人の中にある「その場にふさわしいものを選びたい（扱いやすい・失礼にならないことも含む）」という価値観を基盤に，いくつかの情報（食事に対する個人の考え，相手に不快感を与えないためのマナー，ミーティングの主催者側から見た値段に対するイメージ）

が促進的記号として働き，本人にとって普段はあまり注文することがない「パン系」の食事を選ぶという新たな行為が生じていた。

BFP ②「たまごサンドを食べようと思う」では，サンドイッチに対して「柔らかくて食べやすそう」という促進的記号が価値観と再度結びつき最終的に「たまごサンドが好き」という促進的記号により「たまごサンドを頼む」という行為へとつながった。このようにして EFP「たまごサンドを食べる」という食物選択に至った。

2.「たまごサンドを食べる」に至った内化と外化プロセスについての考察

以上の分析で，食事に対する個人の考え，相手に不快感を与えないためのマナー，ミーティングの主催者側から見た値段に対するイメージが促進的記号となっていたことが考察でき，メニューから個人が食べるたった一つの料理を選ぶ過程において他者や社会的なマナーを如何に意識していたかが明らかになった。木佐木(2008)も述べていたように，共食は食事を共にする他人のまなざしを意識してなされる行為であるという点において，その時の立場や状況での「ふさわしさ」をどのように考えていくのかということについて本事例を通じて考察することができたのではないだろうか。言い換えれば，一つの料理を注文するという行為から，その場での「ふさわしさ」を個人がどのように考えて生きているのかを考察することができるのではないか。また，それは個々人がこれまで生きてきた環境やこれまでの食事に対する経験，食べ物に対するイメージなどを浮き彫りにし，自文化を省みることにもつながると考える。

また，本事例で興味深いと感じたのは，メニューの中から候補を選び始めた時の促進的記号である「その場の雰囲気に合ったものや特徴的なものが食べたいと言う気持ち」と，最終的にたまごサンドを頼む時に現れた「たまごサンドが好き」という促進的記号が，個人の嗜好などと結びついていると考えられる個人的助勢（PG）であったことである。つまり，「たまごサンドを食べる」という行為に至るのに，個人的

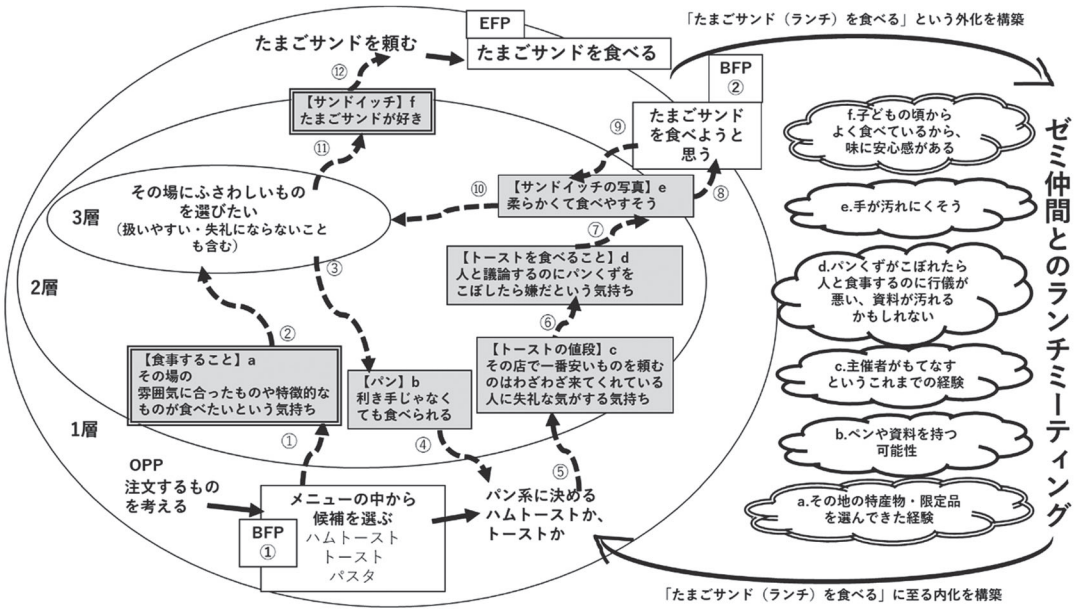

図 4　TLMG とイマジネーションによる「たまごサンドを食べる」に至るまでの内化と外化のプロセス

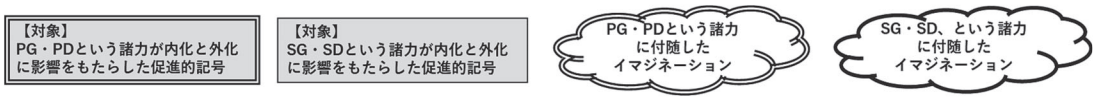

図５　本 TLMG 内での表記

な嗜好を伴う諸力の影響を受けることから始まり，その経過でマナーや他者との関わりを伴う諸力が促進的記号となって現われ，最後に再度個人的な嗜好を伴う諸力が後押しすることで食べるものを決定するという行為に至っていた。今田（1992）は食物選択また摂食の開始・終了には感覚感情過程が重要な役割を果たしていると述べており，本事例での結果とも関連性のあるものだと考えられるだろう。

Ⅶ. おわりに

本稿では「コト」としての食をテーマとし，TEA を用いて，ゼミ仲間とのランチミーティングという状況における「たまごサンドを食べる」に至った食物選択のプロセスと内化と外化のプロセスについて検討した。まず TEM を用いて「たまごサンドを食べる」に至ったプロセスを分析するため，SG・SD という社会的諸力に加えて PG・PD という個人的諸力を用いた。そして，SG・SD および PG・PD の「対象（物，出来事，関係性など）」を SG･SD および PG･PD に【　】で併記し，対象となったものに対する解釈を明らかにしていった。このことにより，対象（物，出来事，関係性など）が単なる対象物ではなく，個人の解釈を伴った記号として作用していたことが示唆された。その上で過去・現在・未来をイメージするイマジネーションを用いた分析を行い，今―ここにいる自分の選択に対する理解を深めることができた。また，SG・SD および PG･PD という諸力を分析することによって「たまごサンドを食べる」という食物選択に影響を与えた「他者の存在を強く意識させる諸力」,「サンドイッチそのものを選ぶことに関する諸力」,「恒常的諸力」という３つの社会的・心理的影響を及ぼした諸力を捉えることができた。

最後に，イマジネーションを手掛かりとし，TLMG を用いて「たまごサンドを食べる」に至った内化と外化のプロセスについて考察した。その結果,「その場にふさわしいものを選びたい（扱いやすい・失礼にならないことも含む）」という個人の価値観を中心にして個人内で食物選択における調整がされており，TEM で捉えられた SG・SD および PG・PD が「たまごサンドを食べる」ように促す記号，すなわち促進的記号となっていたことを明らかにした。促進的記号となった諸力には，個人的な嗜好を伴うものとマナーや他人とのかかわりを伴うものとがあり，それらが内化と外化のプロセスに影響を与えていたことがわかった。そして，「ゼミ仲間とのランチミーティング」という状況下で，個人の食べたい物と相手に不快な思いをさせないようにするためのマナーに対して個人がどのように思考し，折り合いをつけながら「たまごサンドを食べる」という食物選択に至ったのかを考察することができた。

本稿では TEA を用いて共食という場における一個人の食物選択プロセスと内化と外化のプロセスを捉えることを試みたが，異なる個人と個人（二人以上）が互いに共食という場でどのような社会的振る舞いを見せるのかという点について考察することも可能であると考える。それは，個々人が振る舞う目に見える行為と目には見えない個人の心がどのように結びついているのかを理解することを助けるものとなり，異なる文化を持った一人ひとりの生き方を尊重しながらともに生きていく人間の文化的な振る舞いについて考える研究に貢献できるのではない

だろうか。このような異なる個人と個人（二人以上）のそれぞれが持つ他者に対する意識がどのように影響を及ぼし合うのかを分析したり，互いが関わり合うことでどのようにして社会性が育まれていくのかを分析したりすることもできるだろう。

二人以上を対象にして，相互に影響を及ぼし合う文化的な振る舞いを捉えることは今後の課題としたい。

引用文献

有馬道子（2014）改訂版 パースの思想――記号論と認知言語学．岩波書店．

Bee, W.（2010）Sandwich: A Global History.: Reaktion Books in the Edible, London, UK. 月谷真紀（訳）ビー・ウィルソン（2015）食の図書館 サンドイッチの歴史．原書房．

福田茉莉（2015）1 － 3 分岐点 人生径路における分岐とその緊張関係．安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）ワードマップ TEA 実践編 複線径路等至性アプローチを活用する．新曜社，13–20.

塙幸枝（2019）第 2 章「ふさわしさ」をめぐるコミュニケーション 読めない空気．池田理知子・塙幸枝（編）グローバル社会における異文化コミュニケーション 身近な「異」から考える．三修社，25–32.

池田理知子（2019）第 1 章 他者との出あい「異なる」という意味．池田理知子・塙幸枝編著　グローバル社会における異文化コミュニケーション 身近な「異」から考える．三修社，13–20.

石川伸一（2019）「食べること」の進化史 培養肉・昆虫食・3D フードプリント．光文社．

石毛直道（2015）日本の食文化研究　社会システム研究（特集号），9–17.

今田純雄（1992）食べる――日常場面における人間の食行動に関する心理学的考察．心理学評論，Vol.35，No.4，400–416.

井本由紀（2013）オートエスノグラフィー 調査社が自己を調査する．ワードマップ 現代エスノグラフィー 新しいフィールドワークの理論と実践．新曜社，104–111.

木佐木哲朗（2008）文化的卓越食物と料理・共食の文化．県立新潟女子短期大学研究紀要，45，261–272.

熊倉功夫（2014）岩波人文書セレクション 文化としてのマナー．岩波書店．

岡部美香（2018）第 8 章「食べる」ことになぜ作法が求められるのか――「食べる」に関する教育人間学的考察――．八十島安伸・中道正之（編）シリーズ人間科学 1 食べる．大阪大学出版会，179–202.

サトウタツヤ（2015a）文化心理学から見た食の視点から食文化とその研究について考える．社会システム研究（特集号），197–209.

サトウタツヤ（2015b）1 － 1 複線径路等至性アプローチ（TEA）TEM，HSI，TLMG．安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）ワードマップ 複線径路等至性アプローチ 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ．新曜社，4–8.

サトウタツヤ（2019）第 3 章 記号という考え方 記号と文化心理学 その 1．木戸彩恵・サトウタツヤ（編）文化心理学 理論・各論・方法論．ちとせプレス，27–39.

徳永弘子・庄司優・武川直樹（2015）孤食と共食における人の食事行動の仕組み．2015 年度日本認知科学学会第 32 回大会．680–687.

タニア・ジトゥン（2015）移行，イマジネーション，そして TEM．木戸彩恵（訳）安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ．新曜社，97–100.

吉村和真・おおひなたごう・佐藤守弘（2020）マンガが描く食――「目玉焼きの黄身 いつつぶす？」と行為としての〈食べること〉．日本記号学会（編）食の記号論 食は幻想か？．新曜社，56–109.

安田裕子（2015a）1 － 6 行動と価値・信念 発生の三層モデルで変容・維持を理解する（その 2）．安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）ワードマップ TEA 実践編 複線径路等至性アプローチを活用する．新曜社，33–46.

安田裕子（2015b）2 － 4 画期をなすこと 研究者の視点と所在．安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）ワードマップ TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ．新曜社，46–51.

安田裕子・サトウタツヤ（編）（2017）TEM でひろがる社会実装―ライフの充実を支援する．誠信書房．

安田裕子（2019）1 － 2 TEA（複線径路等至性アプローチ）1 章「過程×実存性」―モデル構成．サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（編）ワードマップ

質的研究法マッピング 特徴をつかみ，活用するために．新曜社，16–22.

Valsiner, J.（2007）Culture in Minds and Societies: Foundations of Cultural Psychology. California: SAGE Publications. ヤーン・ヴァルシナー・サトウタツヤ（監訳）（2013）新しい文化心理学の構築――〈心と社会〉の中の文化．新曜社.

Zittoun, T. & Gillespie, A. T.（2016）. Imagination: Creating Alternatives in Everyday life. The Palgrave Handbook of Creativity and Culture Research. Palgrave Macmillan UK. p225–242.

Zittoun, T. & Valsiner, J.（2016）. Imagining the Past and Remembering the Future: How the Unreal Defines the Real. In Sato, T., Mori, N. and Valsiner, J.（2016）. Making of The Future: The Trajectory Equifinality Approach in Cultural Psychology. Information Age Publishing. pp.3–19.

（受稿日：2020. 11. 30）
（受理日：2022. 3. 20）

Original Article

Promoter Sign by Imagination and Three-Layer Model of Genesis: Case Study on Eating

KAMIKAWA Taeko [1], MIYASHITA Taiyo [1), 2)] ,
YASUDA Yuko [2)] and SATO Tatsuya [2)]
(Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University [1)]/
The Institute for Societal Values in Future Generations, The Japan Research Institute, Limited [2)] /
College of comprehensive psychology, Ritsumeikan University [3)])

This study analyzes and discusses eating as an experience and a process of food selection. The case study consists of observing internalization and externalization using TEM and TLMG in the context of a lunch meeting with fellow seminar participants using the trajectory equifinality approach. Moreover, the study applied the semiotics of Peirce and imagination theory of Zittoun. By adding the concepts of personal guidance and personal direction, which capture "the mind of the individual that cannot be regulated by others," the study explores the distinction between these two factors and the social forces of "the mind of the individual about manners that must be negotiated with other people who have other values." TLMG analysis suggested that the social and personal forces captured by TEM were promoter signs. In addition, the study elucidated that the mental process leading to the food choice and manner of eating an egg sandwich during the lunch meeting was observed among the participants. In summary, the process centered on the value of selecting appropriately for the occasion. (171 words)

Key Words : co-eating, food choice, imagination, internalization and externalization, trajectory equifinality approach
RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.45, 1–19, 2023.